

令和
7年

水稲収穫後の ほ場管理のポイント

ほ場の乾燥促進 ～ 乾田化で期待されるメリット

- **地耐力（土の硬さ）**が高まり、稲わらの搬出や秋すき込みなどの**機械作業が容易**になります。
- ほ場の**タテ浸透が改善されるため**、温まった水が土壌還元による有害物質を下層に流します。そのため、根は健全となり**生育は良好**になります。
- **乾土効果**が高まり、地力窒素の早期発現で**初期生育は促進**されます（図1）。

1. 溝切りによる表面水排除

- 表面水の排除により、ほ場の乾燥が早まります（写真1）。
- 溝は落水口につなぎ、表面水をほ場外に排除することが重要です（写真2）。
- コンバイン走行跡のわだち等、水がたまる場所は、部分的に溝を切り落水口につなぐなど重点的に改善しましょう。

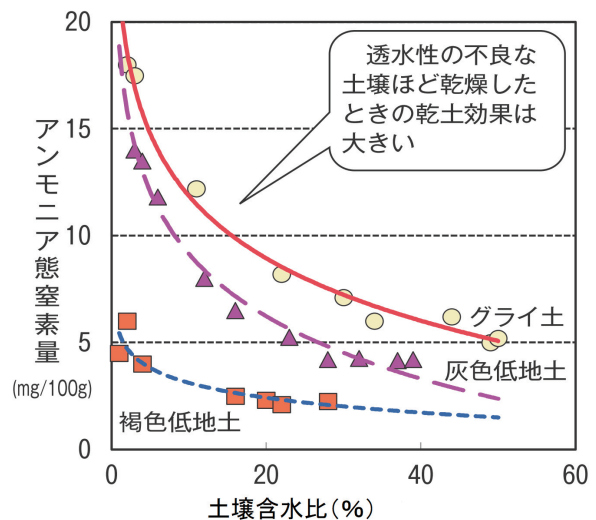


図1 土壌別の乾土効果(H4、上川農試)



写真1 整然と実施された溝切り



写真2 落水口につなげた溝

2025年8月

2. 心土破碎の施工

- 心土破碎は、「**ほ場が乾いているときにできるだけゆっくり施工（2～4 km/h＝人が歩く速度）すること**」がコツです（写真3、4）。



写真3 心土破碎を施工したほ場



写真4 サブソイラの施工

3. 稲わらの適正処理

- 収穫後、稲わらを水田に放置すると、土壌は乾きにくくなります。
- 稲わらは貴重な資源です。**搬出して堆肥や飼料などに有効活用**しましょう（写真5）。
- 搬出により温室効果ガス（メタン）の排出量削減が図られ、環境の負荷軽減につながります。
- 秋すき込みは、透・排水性の良好な水田で施工が可能です**。春すき込みと比較し、メタンの発生は抑えられます。稲わら搬出と同様、環境に配慮した処理方法です（写真7）。

稲わらの野焼きは、煙害（健康・交通）や産地への風評被害の原因になります。
絶対に止めましょう（写真5、6）



写真5 搬出される稲わらロール



写真6 稲わらの野焼き

秋すき込み時の注意点

- 透・排水性不良田は、必ず収穫後に乾田化に向けた改善対策を講じ、乾くようになってから、すき込むようにしましょう（写真7）。

透・排水性不良田に 秋すき込みを行うと・・・

- 春にほ場が乾かないため、**乾土効果は十分発揮されません。**
- すき込み時や春耕起時の練りつぶしで、**透・排水性が悪化し**地温の上昇・酸素供給を妨げ生育に悪影響（**根活性の低下・土壌還元**）を及ぼします。
- 稲わらの分解は遅く、土壌由来の窒素と生育後半に窒素が発現するため、タンパク質含有率は上昇し、**食味を低下**させます。



写真7 チゼルプラウによる秋すき込み

春すき込みのデメリット

- 収穫後のわらの放置は、土壌の乾燥を妨げます。
- 春のすき込みは、土壌還元を強めます。特に透・排水性不良田は、根を傷める有害物質が発生しやすく、地温の上昇は緩慢なため、生育に悪影響を及ぼします（写真8）。
- 稲わら由来の窒素が生育中～後期に発現され、タンパク含有率の上昇に伴い食味の低下につながります。



写真8 土壌還元による有害物質
（水中から気泡が発生する）

4. 畦畔の補修

- 冷害危険期に最大 20 cmの深水管理ができるしっかりした畦に補修しましょう（写真9）。
- 畦塗り施工は土壌水分のある時期に行うと効果的です。



写真9 畦塗り作業

5. 次年度の施肥設計

●土壌診断による適正施肥

肥料価格が高止まりしています。生産コストを抑えるためには、今までの施肥設計に無駄がないか点検が必要です。ほ場毎に土壌分析を行い、次年度の施肥設計につなげましょう（表1～4）。また、土壌分析は3年毎に行いましょう。

表1 基本収量に応じた施肥標準量（北海道施肥ガイド2020）

基準収量 (kg/10a)	全量全層施肥における窒素施肥量(kg/10a)					リン酸 (kg/10a)	カリ (kg/10a)
	低地土(乾)	低地土(湿)	泥炭土	火山性土	台地土		
420	—	—	—	7.5	6.5	8.0	8.0
450	7.5	7.0	5.5	8.0	7.0		
480	8.0	7.5	6.0	8.5	7.5		
510	8.5	8.0	6.5	9.0	8.0		
540	9.0	8.5	7.0	9.5	8.5		
570	9.5	9.0	7.5	—	—		

注1 各地帯区分・土壌区分の基準収量に応じ、施肥量を算定する。

注2 実際の各ほ場の収量水準に応じ、窒素施肥量を±0.5kg/10aの範囲で増減する。

注3 全層・側条組合せ施肥を実施する場合の窒素施肥は、側条施肥を3.0～4.0kg N/10a程度とし、総窒素施肥量を表の値から0.5kg/10a減肥する。

●土壌診断値に基づいた施肥量

表2 土壌窒素肥沃度水準による窒素施肥対応（本田）

窒素肥沃度 区分	増減 (kg/10a)	注
低	+0.5	注1 窒素肥沃度区分は北海道施肥ガイド2020、24ページを参照する。 注2 窒素減肥は、全層施肥部分から行う。なお、減肥後の窒素施肥量は初期生育を確保するため、4kg/10aを下限とする。 注3 白米タンパク質含有率6.5%以下を目標とする場合は、基本技術（側条施肥、健苗育成、適期移植、栽植密度向上、水地温上昇対策、登熟中後期の土壌水分確保など）が実行されることを前提に、全層施肥部分からさらに0.5kg/10aの窒素減肥を行う。
中位	±0	
やや高	-0.5	
高	-1.0	

表3 リン酸、カリ、苦土およびケイ酸の土壌診断値に基づく施肥対応（本田）

リン酸		カリ		苦土		ケイ酸	
有効態リン酸含量 (mg/100g)	施肥量 (kg/10a)	交換性カリ含量 (mg/100g)	施肥量 (kg/10a)	交換性苦土含量 (mg/100g)	施肥量 (kg/10a)	ケイ酸含量 (mg/100g)	ケイカル施用量 (kg/10a)
～5	16	0～7.5	14	0～25	1～2	0～10	180～240
5～10	12	7.5～15	11	25	無施用	10～13	120～180
10～20	8	15～30	8			13～16	60～120
20～30	6	30～	5			16～	0～60
30～	4						

注 側条施肥実施時にリン酸減肥を行う場合は基肥から減肥する。

表4 有機物施用に対応した窒素、カリの減肥量

有機物の種 (標準的な施用量)	連用年数	窒素減肥量 (kg/10a)	リン酸減肥量 (kg/10a)	カリ減肥量 (kg/10a)
稲わらたい肥 (現物1t/10a)	1～4	1	4	2
	5～9	1.5		
	10～	2		
家畜糞たい肥 (現物1t/10a)	1～4	1.5	－	4
	5～	2		
稲わら直接すき込み (400～600kg乾物/10a)	1～4	0～0.5	－	
	5～9	1		
	10～2	2		

注 窒素肥沃度による施肥対応を行う場合は、たい肥・稲わらを5年以上連用している場合でも単年度施用の減肥可能量を用いる。